



スタミナ食材

遊佐のんにく

地域で受け継がれるにんにく

遊佐町では、にんにくの在来品種が栽培されている。にんにくといえば一般的に白いイメージがあるが、遊佐のんにくはなんといっても赤紫色の見た目が特徴だ。生産者の一人である池田隆さんは、先代から受け継いで栽培を続けており、その期間は60年になるという。先代が近所の生産者から譲り受けたのがきっかけだ。一般的なにんにくと比べ病害虫に強く、実が2割ほど大きい。また、出荷先からは風味がいいと言われたとのこと。

現在まで栽培が続けられている遊佐のんにくだが、これまで多くの苦労があったという。まずは種づくりだ。遊佐のんにくは、収穫したものをから来期の種を確保する自家採取で受け継がれてきた。にんにくの実ひとつに六個の種が入っており、ひとつひとつ皮をほぐして種をつくっている。にんにくの種は10 aあたり約100 kg必要であり、池田さんは毎年約250 kgもの種づくりをしている。

種づくりの後も大変だ。肥料が大量に必要で、25 a当たり2tトラック3台分もの堆肥を入れて育てている。また、大量のにんにくを収穫後すぐに乾燥し、その後は温気でカビが発生しないように管理しなければならぬ。こうした手間暇をかけながらも先代から受け継いだにんにくを守り続けている。

地域全体で栽培へ

遊佐町では、山形県が主体となっているほ場整備工事が多くの地域で行われている。ほ場の大区画化によって、稲作作業が省力化・効率化されたことで余力が生まれた。それを契機に、地域の高収益作物としてにんにくの生産拡大の機運が農家の間で高まりつつある。

現在は、にんにくの生産数全国1位の青森県での栽培方法の研修や、事業により大区画化されたほ場でのにんにくの栽培実証を計画するなど、生産拡大に向けた取り組みが加速している。

今後、栽培環境を整備することでにんにくの生産数を増やし、地域のブランド化が期待される。



生産者の池田隆さん

「にんにくは皮が厚く、むくのに苦労する種づくりが特に大変」と話す

にんにく栽培のサイクル

③ 収穫 (7月)



にんにくを掘り起こしながらコンテナに積み

② 消毒・摘芽 (4~6月)



トウ(花ができる茎)を摘み取る

① 植え付け (10月)



10月下旬に種を植え、冬は雪の中に放置

食卓へ!



例) 牛肉のガーリック炒め

⑤ 出荷 (8月)



東京の「生活クラブ」や遊佐町にある道の駅「ふらっと」に出荷

④ 乾燥 (7~8月)



重さが3割減るまで干す